

会頭コラム「議論して、行動して、結果を問う」

このスローガンを掲げてスタートした今年度も、早いものでもう半分。半期での振り返りをしっかりおこなって、後半にまた一段ギアを上げていきたいと思えます。

いくつかご報告をいたします。11月1日から小田原駅の東海道本線の発車のたびに「えっさほいサツサ」が流れます。市民の方の提案がきっかけで、当所が動き、会員の皆さんのご協力で形にすることができました。観光という視点で小田原を五感で感じていただくために有効ではないかと思っています。

また、あまり目立たないことなのですが、10月の小田原市議会で「既存宅地開発許可制度」の延長が決まりました。当所の建設部会を中心とした要望活動が実を結びました。一部の地権者や関係業界の利権を守るという矮小な目的ではなく、この小田原の地の利を活かし、住む人を増やすためにという大きな視点が必要だと考えての活動です。

小田原をより住みやすい、住みたくなるまちにする努力は人口減社会だからと言って疎かにしてはなりません。小田原ではそのためには大きく2つの方策が考えられます。

一つ目は、社会の高齢化に対応して「コンパクトシティ」という考え方に沿ってまちなかの便利のいいところに快適な住環境を作ること。まちなかににぎわいを取り戻しつつ、行政のコストが下がる効果も期待できます。

二つ目は、郊外の緑豊かな環境でゆったりと住みたいと望む人のための住環境の整備です。首都圏から至近に位置しながら豊かな自然が身近にあるこの小田原・箱根ならではのまちづくりです。かけがいのない自然豊かな市街化調整区域を、乱開発を阻止しながら、どう上手に利用するかという知恵が必要です。この2点について今後とも調査、研究と議論を重ねてまいります。そして、行政に具体的な提言をしてまいります。そのためには会員皆様方のご意見やお知恵が必要です。

この夏、2か月に亘り、まちじゅう(会員さんの事業所やお店)を会場にした産業まつり「小田原箱根まちなか博覧会」は小田原、箱根の青年部ががっちりスクラムを組んで企画・運営をしてくれました。だんだんと産業まつりの新しい形、本来の形が見えてきたように思います。まちを元気にするには若い力が必要です。

皆さんの関心(あるいは不安)が高い地下街の再開、依然として方向が見えない駅前の再開、大規模工場の跡地の問題、独り立ちさせなくてはならないまちづくり会社など、私たちの商売に少なからず影響があるであろう「まちづくり」に関してだけでも課題は山積みです。会議所として積極的に意見を出してまいります。また、県の「未病を治す」プロジェクトや東京オリンピック・パラリンピックへの対応も今から動いて決して早すぎることはありません。

たとえ小さくとも目立たなくても、ひとつひとつ「結果」を出してまいります。そのためには、もっともっと「議論」と「行動」が必要だと自らを叱咤しています。ぜひ一緒に!

会頭 鈴木悌介